

親鸞仏教センター通信

2003.
December

第8号

2003年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

今を振り返り、未来につなぐ

親鸞仏教センター研究員 櫻井智浩

今年も、残すところ1カ月となった。年末に近づけば、今年の重大ニュース等といったかたちで今年を振り返ることになるだろうが、むしろ、この「年末」という区切りの時期にしか、過去の出来事を「振り返る」ことができない、というほうが実感に近い。実際、日常の中で、物事を「振り返る」局面が、少なくなったような気がする。それよりも、日常では、物事の「変化」に対応するのに精一杯で、「振り返る」ことはかえって妨げとなる。世相も、個人がおかれている状況も、めまぐるしく変化している。その変化は、「成長」「進歩」という、より良い方向に向かう兆しとして捉えられていた右肩上がりの高度成長時代と異なって、現状、そして将来の不安を増幅する方向に作用している。そのことを十分認識しながらも、やはり「苦難の今からより良い未来へ」という進歩史観に則って問題の解決を図らざるを得ないが、そのことがまた、今のわれわれのあり方を窮屈にしている。より良い未来の希求、そのこと自体を否定するつもりはない。しかし、それが果たされるためにも、「今」から「未来」へ、というだけではなく、「今、ここにある」こと、そこに踏みとどまり、それがいかに成り立っているのか、その根拠を「振り返る」視座が、求められているのではないかと。

仏教は、「今、ここにある」ことを振り返ることを大切にしてきた。『教行信証』の冒頭は、「竊かに以^{ひそ}みれば」という、まさに「振り返る」言葉から始まる。「竊かに」というのは、公なる本願の仏法を私的に了解したということを表す謙譲表現（『親鸞仏教センター通信』創刊号・『歎異抄』試訳〈序〉語註参照）であるが、その謙譲の理由をさらに尋ねるならば、それは決して教条主義的な配慮に基づくものではなく、親鸞聖人が尋ね当てられた「今、ここにある」ことを成り立たせている「弥陀^{みだ}の誓願^{せいがん}」との出遇い、その感得の事実^{じじつ}に自ずと頭が下がる、ということであろう。「今、ここにある」ことを振り返ること、それは今を回復することに他ならないのである。

苦悩^{くるなう}の坩堝^{くわう}のような首都・東京で、各界の有識者の方々から現代人の諸課題の実相を教えていただく中で、われわれの課題も少しずつ見えてきているように思う。家族のあり方、社会問題への取り組み方、そして、自分のいのちのかけがえなさの回復。そういった課題を、「今、ここ」に振り返りながら、未来につなげていきたい。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」 妄念を破る浄土の鈴の響き

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第18回と第19回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、第18回では仏教の言葉と浄土の声について、第19回では人間の分別と阿弥陀の正覚について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第14回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

■ 浄土の鈴の音

『浄土論』の中に「虚空功德」と呼ばれる功德があります。その中で「種種の鈴、響を發して、妙法の音を宣べ吐かん」とうたわれています。そこでは何を語っているのかというと、無数の鈴が響きを發して、そして妙法の音を宣べると言うのです。「妙法」というのは真実の法です。すなわち、鈴の響きが、そのまま教えの意味を語りかけ、虚空、空間に満ちあふれるいろいろな音が、そのまま真理を語りかけるような意味をもつという、そういう莊嚴です。

この音というのも、やはり象徴ですね。人間の感覚の対象としてあるものではない。何かそういう見えざる世界が、実は鈴の音のように鳴っているのだ、とわれわれに呼びかけてくる。では、何が鳴っているのかと言えば、人間の妄念を破った無我の仏法を呼びかける音を出しているのだと。われわれは、この世を生きながら、この生活空間の意味を見出せずに生きている。人間の意識や生活、そしていのちを支えている無数のはたらきを見失ったまま生き

ている。まさに空虚に生き、空しく過ごしているのだと。そうした人間存在に、「真実に目覚めよ」と呼びかけ続けているのです。

■ 自分が聞くことのできなかった世界

われわれの生活は、自分に都合のいいことだけが起ってほしい、都合の悪いことは起ってほしくないと思って生きています。しかし、仏法の真理の音に触れると、人間にとって都合の悪いことや困ること、また、つらいことが必ずしも人間存在にとって忌避すべきものではなく、あらゆることが、仏法に目覚めよというはたらきを持ってくると言うのです。それは、人間関心において人間が善いと思う、いわゆるヒューマニズム的な正義感とか、進歩主義という発想ではない地平です。人間は、人間が考えたことは善いことだ、人間が考えたことは正しいことだと、その方向だけに進もうとします。だから、人間存在が本当に置かれているいのちそのものの響きというものが、ある意味で聞こえなくなる。実際、人間は他人のことにはよく気がつくが、自分のことには気がつかない。「あの人は視野が狭い」「あの人は心が狭い」と、人のことはよく見えるが、自分のことはわからない。

ところが本当は、自分がそういう狭い空間を生きて、狭い発想でしか生きていないのだということを、仏法は一人ひとりに呼びかけるのです。だから、親鸞聖人が「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」（『歎異抄』）と領かれたということは、自分のために仏法のことばが呼びかけてく

れていたのだと^{わか}解ったということです。これに触れると、自分が聞くことのできなかった、自分の本当の喜びの世界が聞こえてくるのです。

「一切衆生を救いたい」という願いが、われわれの妄念を破る響きとなって、われわれに呼びかけてくる。その響きのもと、形なき形である如来の願いであったのだと。

人間が人間をたすけたいという関心は、確かに、ある程度はうまくいくにしても、成就是不ない。たすけるために、物を施しても、もらう方はさもしくなるし、あげる方は傲慢になる。人間関係というものは、どうしてもそういう我と我がぶつかった中でのやりとりになる。特に、経済観念で生きている現代生活は、そのやりとりで「得した、損した」ということになってしまう。情けないけれども、そうでないものが聞こえない。それほどまでに鈍感になっているわけです。現代人は敏感になっていると言うけれども、それは嘘でしょう。一部だけ敏感になっているに過ぎないのです。それも不健康な方向にね。だから人間というものは、お互いに哀れな存在であるなあと感じくということが、この鈴の響きなのです。

■ 南無阿弥陀仏の鈴の音

この鈴は、いつでも自由に風が起こって、そしていろいろな音として鳴っている。その音は、南無阿弥陀仏なのです、本当は。南無阿弥陀仏の鈴なのです。南無阿弥陀仏ひとつということが私たちの生活の中に入ると、いろいろなこととの出会いに、いつでも南無阿弥陀仏が違った音をたてる。喜びがあり、悲しみがあり、あの事件が起こり、この事件が起こる。それといっしょになりながら、すべて仏法の音になって聞こえてくる。そういう生活が与えられてくることを、「浄土の生活」と言うのでしょうか。

そういう世界を知らないと、われわれは文字どおりの実体的な感覚で、ぶつかった事件をぶつかった事件としてだけしか、その意味を感得

できない。ぶつかった事件の意味を転じて、自分を育てる意味として、自分の生きている空間を支える意味としていただき直すということは、自分が努力して考えてわかるというよりも、南無阿弥陀仏として、響いてくる音が聞こえてくることなのです。それが、ここで象徴されていることではないかと思うのです。

浄土の鈴は、死んでから聞く音ではない。念仏のところに聞こえてくる声なのです。こうした超越性の声は、われわれがその声を聞ける耳の育つまで待っているわけです。では、そういう耳をどうしたら育てられるのかと言っても、その方法はないのです。われわれに呼びかけてくる本願の呼びかけが、少しずつ少しずつ身に浸みていって、段々に聞こえてくる。南無阿弥陀仏ひとつに、浄土の鈴が聞こえてくるわけです。「ああ、また鳴っているな」と。鳴っているということは、こちらの愚かさが破られるわけです。「ああ、また腹を立てていたな、また欲を起こしていたな、また間違った考えでいたな」と、そういうことに気づかされる。くやしいけれど、残念ではあるけれど、自分の愚かさが見えてくる。自分の愚かさが知らされるといことは、他人から言われると腹が立ちますが、浄土の鈴が聞こえたときはありがたいものです。他人から言われたら、「何だ」と思うでしょう。だけでも、浄土の鈴が聞こえると、「ああ、そうだったなあ」と聞くことができます。それが、浄土の鈴の声というもののなのです。

(文責：親鸞仏教センター)

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講(無料)いただけます。

記

日時：2003年12月12日(金)午後6時30分～9時

2004年 1月23日(金) 同上

2月23日(月) 同上

場所：有楽町・東京国際フォーラムGブロック

JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

て、ひとに念仏をもうさせそうらわばこそ、弟子にてもそうらわめ。ひとえに弥陀の御もおしにあずかつて、念仏もうしそうろうひとを、わが弟子ともうすこと、きわめたる荒涼のことなり。

つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、はなることのあるをも、師をそむきて、ひとつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなんどいうこと、不可説なり。如来よりたまわしたる信心を、わがものがおに、とりかえさんともうすにや。かえすがえすもあるべからざることなり。

④ 自然のことわりにあいかなわば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云々

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

出遇うべき縁があればともに歩み、別れるべき縁があれば、別れていくこともある。そうであるのに、師にそむいて、他のひとについて念仏の教えを受けるのであれば、本願の救いを得られないなどと言うことは、まったくの見当違いである。無限大悲に育てられ目覚めたところを、個人的な所有物でもあるかのように、取り返そうとでもいうのであろうか。どう考えても、断じてあつてはならないことである。人間のはからいを超えた、如来の本願の大きなはたらきとひとつになるならば、如来の恩を知ることができ、また師の恩をもうなずくことができるのである。

語 註

①【専修念仏】自力の諸行を捨てて、本願他力の念仏を選びとること。

②【念仏をもうす】「念仏をもうす」とは、すなわち本願を信ずることである。如来の本願が念仏一行を、衆生を救済するための行として選び取っているからである。

③【如来よりたまわしたる信心】「如来よりたまわしたる」という表現は、自分に起こったところが自分を超えた質のものだから、それを「如来よりいたどく」と表現する。すなわち、有限な自己に無限なるものがはたらくこと（大悲）に対する感謝を含んだ表現である。

④【自然】願力の自然をあらわす。親鸞には自然法爾章（「末燈鈔」「正像末和讃」）がある。

(訳・語註…親鸞仏教センター)

『an'jali』第6号および

『現代と親鸞』第4号を刊行

このたび、『an'jali』第6号（写真上）、並びに『現代と親鸞』第4号（写真下）を刊行しました。

『an'jali』第6号では、京都大学名誉教授の木村敏氏、オリックス会長の宮内義彦氏、みずほフィナンシャルグループ名誉顧問の橋本徹氏、東京大学大学院教授の佐藤学氏、三菱重工業航空宇宙システムの大江克利氏など、十名の各専門分野の方々に、現代社会・現代人の諸課題について、ご執筆いただいています。一方の『現代と親鸞』第4号では、研究論文（櫻井智浩研究員、新田智通嘱託研究員）、「現代と親鸞の研究會」から聖路加看護大学助教授の森明子氏、作家の辺見庸氏、安田女子大学教授の春日キスヨ氏の問題提起と質疑。また、「親鸞思想の解明」（本多弘之所長）を掲載しています。なお、『現代と親鸞』（創刊号から）購読のお申し込みは、センターまで。



『聖典』の試訳（現代語化）

「親鸞は弟子を一人も持たないというが、たくさんの弟子があつたではないか」と尋ねられたことがあつた。確かにたくさんさんの弟子があつた。しかし、「弟子一人も持たず」という言葉は、親鸞の受け止めている人間観を語っているのである。あくまで親鸞自身の意識の中では、自分を師匠と考えたこともないし、弟子を持ったという意識もなかったのである。自分は、どこまでいっても「仏弟子」であり、指導者ではない。指導者と呼べるものは、釈迦であり、阿弥陀如来であると受け止めていた。逆に、自己を仏弟子として見出した人間だけが、結果的に、他者から師匠として仰がれるのである。自分を指導者であると自認している人間は魔性を持つ。親鸞は、その魔性の毒を生涯、見つめていた。

（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第六条〉

原文

①せんじゆねんぶつ

専修念仏のともがらの、わが弟

子ひとの弟子、という相論のそう

ろうらんこと、もつてのほかの子

細なり。

親鸞しんらんは弟子いちにん一人も持たずさうろ

う。そのゆえは、わがはからいに

現代語訳

本願他力の念仏を信奉する人々のなかで、自分の弟子だ、ひとの弟子だという争いがあるのは、もつてのほかのことである。

私《親鸞》は、弟子を一人も持たない。というのは、私の工夫や努力で、ひとに「本願を信ずることろ」を起こさせることができるならば、自分の弟子であるということもできるであらう。しかし、本願力のはたらきに促されて、本願を信ずることができたひとを、自分の弟子であるということは、とんでもないこころえ違いである。

親鸞仏教センターの動き

（2003・9～11）

■2003年

- 9・1 『親鸞仏教センター通信』第7号を発行人事発令（常規聴講証研究員）
- 9・4 学会発表（田村晃徳研究員「清沢満之の心理学理解」・日本宗教学会・天理大学）
- 9・6 学会発表（田村晃徳研究員「清沢満之における『靈魂』の理解、櫻井智浩研究員「ブトン造」入善提行論」注釈における教証について」・日本印度学仏教学会・佛教大学）
- 9・12 親鸞聖人ご命日のつどい
- 9・17 第76回研究会（研究・交流・出版等の実働企画）第15回清沢満之研究会。第20回「親鸞思想の解明」連続講座
- 9・18 現代と親鸞の研究会⑩「今日の子と教育の危機とは」臨床教育研究所「虹」所長・尾木直樹氏（東京ガーデンパレス）
- 9・19 第26回英訳「教行信証」研究会。第30回『歎異抄』研究会。
- 9・25 第2回親鸞思想の解明懇談会
- 10・3 現代における人間像に学ぶ研究会①「心理学と現代社会」千葉大学教育学部助教授・諸富祥彦氏（千葉大学）
- 10・10 親鸞聖人ご命日のつどい
- 10・17 第1回親鸞思想の解明シンポジウム（東京国際フォーラム）講演…「科学技術文明と現代の不安」國府田隆夫氏（東京大学名誉教授、パネリスト）下田正弘氏（東京大学大学院助教授）、本多弘之所長学会発表（櫻井智浩研究員「入善提行論」般若章「空性の修習の階梯」をめぐって」・日本西蔵学会・佛教大学）
- 10・25 旧東京大谷会館居住学生有志のつどい
- 11・6 第31回英訳「教行信証」研究会「浄土論註」と二種回行「元上野学園大学教授・坂東性純氏（浅草ビューホテル）」
- 11・7 第22回「親鸞思想の解明」連続講座
- 11・14 親鸞聖人ご命日のつどい
- 12・1 第22回「親鸞思想の解明」連続講座

『聖典』第6号、「現代と親鸞」第4号「親鸞仏教センター通信」第8号を発行人。現代と親鸞の研究会⑩「現代の世界の問題をどう見るか」ジャーナリスト・筑紫哲也氏（ホテルニューオータニ）

現代と親鸞の研究会・第9回

カルトの予防と宗教教育

東北学院大学名誉教授 浅見 定 雄



浅見定雄 氏

2003年5月16日、東京ガーデンパレス（文京区）において、東北学院大学名誉教授の浅見定雄氏を迎え、「現代と親鸞の研究会」を開催した。

「日本脱カルト研究会」（JDCC）の代表理事も務められ、カルト問題に精通された浅見氏に、カルトの予防と宗教教育について語っていただいた。当日は、助言者として元朝日新聞東京本社・「こころ」編集長の菅原伸郎氏に同席いただき、忌憚のない意見をいただいた。ここにその一部を紹介する。（本多雅人）

■ カルトの予防

—破壊的カルトのマインド・コントロール

カルトの予防に対して有効なのは、「マインド・コントロール」（mind control）についての知識だというのが私の考えです。私の公理は、「カルトは必ずマインド・コントロールを使う」ということです。その理由は、ふつうの人間に悪いことを良いことだと思わせるためには、それなりの精神操作が必要だからです。そうでなければ、もともと素直で優秀だった若者たちが、サリンを撒いたり、靈感商法をしたりするはずがないのです。他人の心を自分の目的（欲望や野心）のために、しかも本人には納得せずくだと思わせながら心を操作するのが、「破壊的カルトのマインド・コントロール」です。具体的に見ていくと、カルトは、まず勧誘段階では正体を偽り、本当のことは言いません。中

身も教えない。これは、宗教ばかりでなく、悪徳商法でも自己啓発セミナーでも同じです。

そこでそれに対する予防ということですが、どのような勧誘でも、まず何かに誘われたら、その段階で「誘われたままについて行ったら、最後に私は何をさせられているのでしょうか」と尋ねることです。相手側は、決して「最後は、高いものを買わされています」とか、「出家させられて、平均睡眠時間が4時間で、こき使われています」とか、「サリンを撒かされています」とは言えません。誘われた最初の段階で、最後は何をさせられるのかということを聞くことが一番いいと思います。

それからもう一つの予防は、その場ですぐに決めないで、「私は今日、街頭でこういう誘いを受けた」と、家族や友人に語ることです。すると、「それ、まずいぞ、A教団かも知れないよ」などと言ってくれる人がいるでしょう。

では次に、もし入り口で防げなくて、カルトに入ってしまった場合についてお話しします。カルトは、必ず途中で「実は、ここはA教団です」とか、「実は、中級コースがあるんです」と言うように、初め誘った時と話が変わってきます。つまり、カルトというのは、エレベーターのように、同じ場所からまっすぐに上に登っていくのではなくて、石段を登るように、気がついてみるとスタート地点とはだいぶ違ったところへと連れて行かれてしまうのです。

そういうことがあるので、たとえ兄弟姉妹であっても、どんなに親しい職場の先輩や恋人であっても、途中で話が変わってきたなと思ったら、その段階で断固としてやめることです。

ここまでが、早期治療も含めた予防です。こういう内容を前もって教えておくことが、子どもたちやご門徒の方々に役立つぎりぎりの線だと思っています。

ただし、これ以上深入りした場合には、専門家のお世話になるしかありません。宗教者や心理カウンセラーのほかに、最近は、弁護士さんも、随分、精神的にも助けになってくださる場合が多いです。

■ 宗教教育 — 教育基本法と宗教教育

わが家の子育ての経験から申しますと、日本の教育は小学校まではまだ我慢できるのですが、中学になると突然「管理」と「選別」が激しくなります。そのため、子どもたちには本当に信用できる「居場所」がなくなり、それが後に、彼らをカルトのような幻想的「居場所」へ走らせる原因にもなるのだと思います。

管理教育やいじめをたくさん受け、それに慣れてくると、カルトの管理や虐待にも順応してしまうのです。あるいは逆に、管理教育やいじめに反発して別の世界に行きたいと思うと、その行き先がカルトであったりするわけです。そういう意味では、順応しても、反発しても、若者はカルトへ行く危険があります。ところが、このようにたくさんの問題が社会や教育のほうにあるのに、「キレる」などと言って、これを理由に、もっと子どもたちを人工的に良くしようということで、今、「教育基本法」の改正が、問題になったりしています。これは本末転倒だと私は思います。

きょうご同席いただいている菅原伸郎さんは、著書のなかで、宗教教育について5つの教育（宗教知識教育・宗派教育・宗教的情操教育・対宗教安全教育・宗教寛容教育）を挙げ、「やれることから始めよう」と訴えかけておられますが、「教育基本法」の改正で、特に注目されているのが「宗教的情操教育」です。これについて菅原さんは、人間の根源的な情操教育としては、特定の「宗教的感情」よりも、もう

ひとつ手前で、しかも普遍的な「生とは何か」「死とは」「自分とは」というようなことを深く考えさせる教育が必要ではないかと提言しておられます。私の考えもこれと非常に近いです。政府の学習指導要領の言うような、「自然（を超えたもの）への畏敬の念」などというものを公立の先生がみな生徒に教えるべきだと言われたら、自然界についてそんな感情を持っていない先生は、自分の良心を偽って生徒に教えることになります。不誠実なことほど、教育で悪いことはありません。しかしどんな教師でも、「たとえば私個人は無神論者だけれど、世界中にはこんなにいろいろな宗教があって、その人たちもみな同じ地球の仲間だよ」というように、知的でしかも寛容な内容なら、いくらでも語れるはずです。そういう意味からも、宗教教育は、「情操」よりもまず生徒の知的的好奇心に訴えて行うべきだと私は考えています。

（文責：親鸞仏教センター）

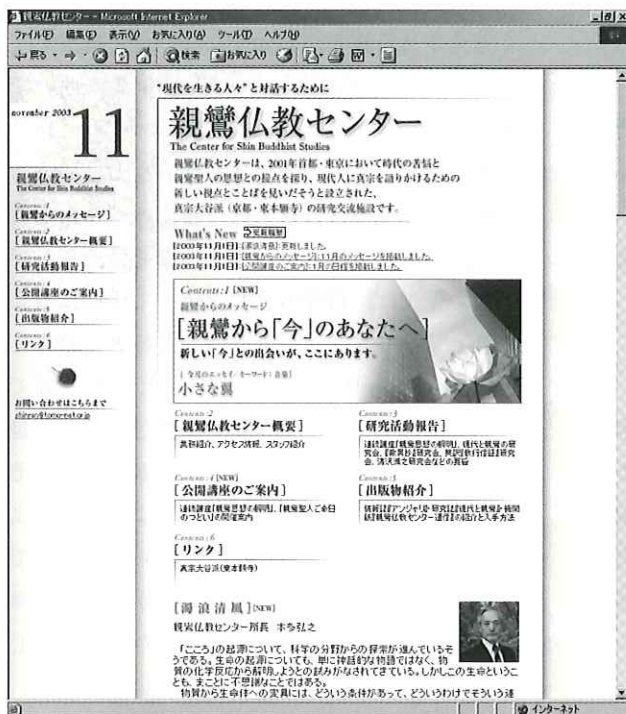
※浅見定雄氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第5号（6月1日号）に掲載予定です。

浅見 定雄（あさみ さだお）東北学院大学名誉教授 1931年、山梨県生まれ。東京神学大学博士課程修了、ハーバード大学神学部博士課程卒業、神学博士。著書に、『にせユダヤ人と日本人』（朝日新聞社）、『新宗教と日本人』『聖書と日本人』『偽預言者に心せよ！〈日本人を考える〉』（以上、晩聲社）、『旧約聖書に強くなる本』『原理運動＝統一教会—その見極めかたと対策—』『なぜカルト宗教は生まれるのか』（以上、日本基督教団出版局）、訳書にスティーブン・ハッサン『マインド・コントロールの恐怖』（恒友出版）などがある。また、『アンジャリ』第4号に「カルトと現代病理」を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」 浅見氏(左)と菅原氏(左から2番目)

親鸞仏教センターのホームページをご覧ください。



トップページでは、所長メッセージ（「濁浪清風（だくろうせいふう）」毎月1日更新）を掲載します。

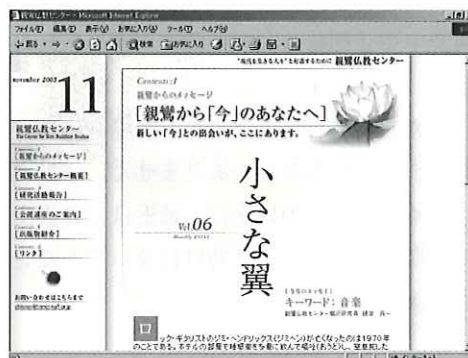
親鸞仏教センターホームページ

<http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

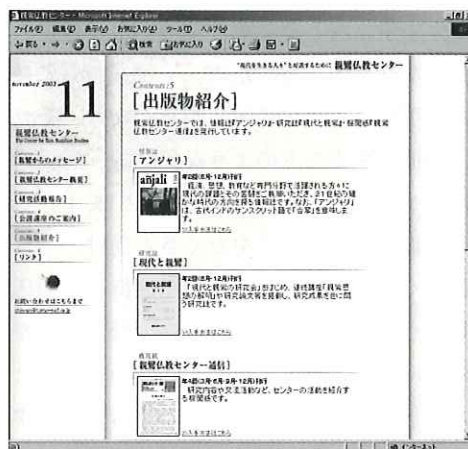
— 親鸞からあなたへのメッセージ —

あ と が き

いまや、日本における自殺者は5年連続で年間3万人を超えている。胸の痛むことである。専門家によると、自殺の主因の一つがうつ病だという。しかも、年々、患者数は増加し続けているというのだ。最近の企業の倒産、リストラなどによる自殺の原因の多くは、うつ病がその背景にあるという。発症の要因は、患者の年齢や性格、学校や職場、家庭でのストレスなどさまざまだが、諸情況により精神の破綻を来していることは間違いないようだ▼ただ、これまでも専門家間での研究成果の共有や情報発信などは、精神・心身関係の学会でそれぞれ行われてきたが、専門家集団として総合的に取り上げる場がなかったという。そんな中、本年7月に「うつ病アカデミー」（代表：昭和大学医学部 上島国利教授）が発足した。この会では、うつ病に関する情報を、医師、臨床心理士、看護師、保健師などの医療現場で共有するほか、企業の人事担当者や



メインコンテンツでは、「親鸞から『今』のあなたへ」をテーマに研究員のエッセイ（毎月1日更新）を掲載します。



出版物紹介では、三誌紙（情報誌『anjali』、研究誌『現代と親鸞』、機関紙『親鸞仏教センター通信』）の紹介と入手方法を掲載します。

製薬会社などにも情報を提供し、社会学者なども加わって学術的なアプローチを進めるという。また、初期段階で患者を診ることの多い内科医や患者の家族とも連携して、最新情報を公開シンポジウムなどを通して市民に発信する。さらに、うつ病の自助グループには精神科医の派遣も予定されている。将来は、就労支援プログラムについても助言するなど、うつ病の理解と啓発に努めると共に、「日本うつ病学会」の設立もめざしているという▼研究と臨床が呼応し合って、人間存在と環境をまるごと診るような活動に期待したい。病気を病気とひとくくりせず、それぞれの人が持つ背景を十分に理解することから始めていただきたい。「生きる力というのは、じぶんの存在が他人のなかで意味があると感じるところから生まれる」（『anjali』第5号）と言われた哲学者・鷲田清一氏の言葉に、あらためて胸を熱くする思いである。（長谷岡）